

5 稲尾岳の貝類相

(1) はじめに

稲尾岳は大隅半島の南に位置し、内之浦町・田代町・佐多町の3町にまたいでいる。標高950m、西には木場岳(890m)、北東方向には荒西山(834m)・甫与志岳(966m)・国見山(887m)などと連山をなし、肝付山地を形成している。

(2) 調査

今回は1996年(平成8年)8月7~9日の3日間、稲尾岳を中心に調査を行った。

8月7日午後、田代町盤山から入山。朽ち木の下にコベソマイマイ、タブキギセル、落ち葉の下からはヤマタニシ、ヤマクルマが採れた。

8月8日、哺乳類・両生類・野鳥の調査班に同行し、8時30分車で宿舎出発、9時45分稲尾岳登山口に到着。9時50分活動開始。昨夜の雨で程よい湿り気があり採集には好適であった。朽ち木の下からアズキガイ、アラナミギセル、ナミハダギセル、カドヒメベッコウを採集した。稲尾神社付近では樹幹に這っているキュウシュウゴマガイ、ヒゼンオトメマイマイ、コベソマイマイが採れた。また、体長12cmほどもあるヤマナメクジを見つけ写真に収めた。

8月9日、田代町東大原の川でカワニナを採取。田代町花瀬のマス釣り場でカワニナ、付近の山林でツクシマイマイ、ヒゼンオトメマイマイ、キュウシュウゴマガイを見つけた。また、田代町南風谷の山林ではツクシマイマイ、キュウシュウゴマガイ、タブキギセルを採取した。

(3) 稲尾岳産陸貝

① ヤマタニシ科

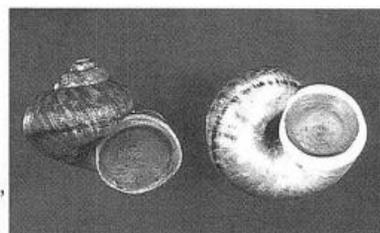
ヤマタニシ *Cyclophorus herklotsi* Martens, 1860

分布：本州(関東以西)、四国、九州

県本土ではどこでも採集できる。

離島では種子島、屋久島、口永良部島、

口之島、甌島まで分布を広げている。



ヤマタニシ

② ヤマクルマ科

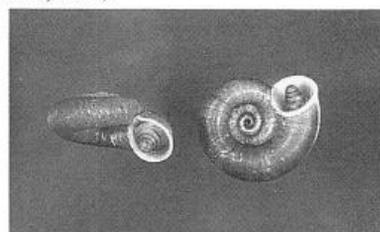
ヤマクルマ *Spirostoma japonicum japonicum* (A. Adams, 1867)

分布：本州(関東以西)、四国、九州

県本土ではヤマタニシ同様落ち葉の

下にいくらでもいる。離島では甌島に

分布している。



ヤマクルマ

③ アズキガイ科

アズキガイ *Pupinella (Pupinopsis) rufa* (Sowerby, 1864)

分布：本州(長野県以西)、四国、九州、対馬

県本土では前2種同様落ち葉の下にいる

ごく普通の貝である。離島では種子島、屋久島、口永良部島、口之島、中之島に生息している。



アズキガイ

④ ゴマガイ科

キュウシュウゴマガイ *Diplommatina (Sinica) tanegashimae kyushuensis*

Pilsbry & Hirase, 1904

分布：山口県，四国，九州

本県で筆者は開聞町・枚聞神社，山川町山川，霧島町梅木，吾平町・吾平山陵で採集している。



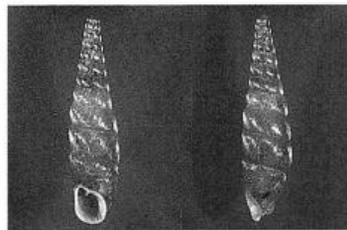
キュウシュウゴマガイ

⑤ キセルガイ科

アラナミギセル *Tranniphaedusa (Trannophaedusa) oxycyma* (Pilsbry, 1902)

分布：九州(大分県，宮崎県，鹿児島県)

本県では霧島町・霧島神宮，枇榔島(志布志湾)，高山町，吾平町，根占町，佐多町で採集されている。



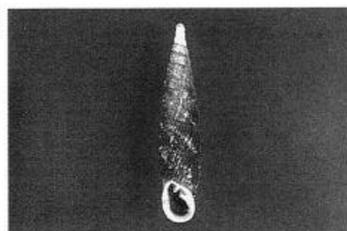
アラナミギセル

⑥ ナミハダギセル *Mesophaedusa cymatodes* (Pilsbry, 1905)

模式産地：田代町

分布：九州南部(宮崎県，鹿児島県)

本県では霧島町・霧島神宮，川辺町で採集されている。



ナミハダギセル

タブキギセル *Mesophaedusa tabukii* Kuroda & Minato, 1985

模式産地：高山町・国見山

分布：大隅半島(これまでに国見山のほか，甫与志岳，高隈山，田代町盤山，稲尾岳で採集されており，大隅半島南部の特産種である。)

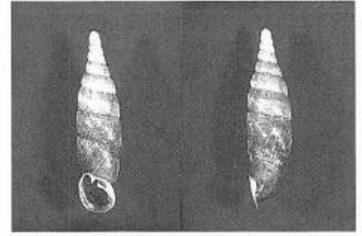
本種は *Mesophaedusa (Mesophaedusa) tabukii* Kuroda (MS) として日本非海産貝類目録(黒田徳米, 1963)に登載されていたが，1985年 *Venus* 第44巻第2号で黒田徳米，湊宏の共著で新種記載がなされた。和名の「タブキ」種名の“*tabukii*”は故榊木忠志氏(元鹿児島師範学校教諭)に献名されたもの。

ギュリキギセル *Phaedusa (Breviphaedusa) addisoni* (Pilsbry, 1901)

模式産地：鹿児島

分布：大阪府南部，九州中・南部

県本土では全域に生息しているが，
離島では坊津町・沖秋日島，甌島に
生息しているのみである。



ギュリキギセル

⑦ ナメクジ科

ヤマナメクジ *Meghimatium fruhstorferi* (Collinge, 1901)

分布：本州，四国，九州，対馬

離島では下甌島，竹島，黒島，口永良部島，
口之島，中之島，奄美大島，徳之島に生息し
ている。



ヤマナメクジ

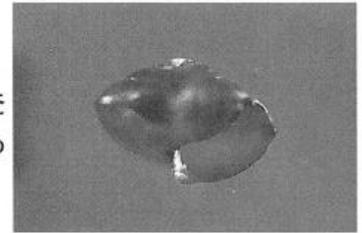
⑧ ベッコウマイマイ科

カドヒメベッコウ *Luchuconus(?) acuta* (Pilsbry & Hirase, 1905)

模式産地：日置郡市来町

分布：九州全域(対馬を含む)

県本土では模式産地のほか，今回の調査
で確認した稲尾岳以外に記録がない極めて
希産種である。



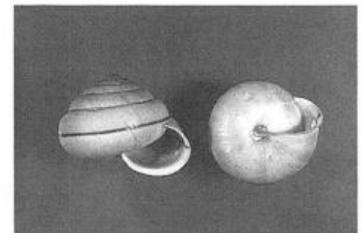
カドヒメベッコウ

⑨ ナンバンマイマイ科

コベソマイマイ *Satsuma (Satsuma) myomphala myomphala* (Martens, 1865)

分布：本州(関東西部以西)，四国，九州(対馬をふくむ)

県本土では全域に生息しているが，
離島では下甌島での記録があるの
みである。



コベソマイマイ

⑩ オナジマイマイ科

ヒゼンオトメマイマイ *Trishoplita collinsoni hizenensis* Pilsbry & Hirase, 1903

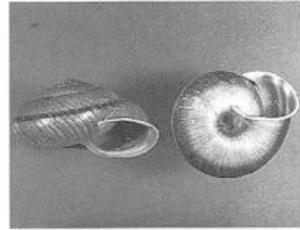
分布：九州全域

県本土では稲尾岳と田代町花瀬で今回採集している。

ツクシマイマイ *Euhadra herklotsi herklotsi* (Martens,1860)

分布：本州(中国), 四国, 九州(対馬, 五島を含む)

県本土では全域に分布しているが,
離島では甌島, 種子島に分布して
いる。



ツクシマイマイ

(4) 分布域から見た稲尾岳産の陸貝

稲尾岳には鹿児島県本土側南部を代表する陸貝相が見られる。本州, 四国, 九州と広い分布域をもつものにヤマタニシ, ヤマククルマ, アズキガイ, キュウシュウゴマガイ, ヤマナメクジ, コベソマイマイ, ツクシマイマイなどがあり全体の53.8%を占めている。ヤマタニシ, ヤマククルマ, アズキガイは山林に入ればどこでも見つけることができる。ツクシマイマイは九州を代表する大型のカタツムリである。九州南部に分布域をもつものにはアラナミギセル, ナミハダギセル, タブキギセル, カドヒメベッコウ, ヒゼンオトメマイマイなど全体の38.5%を占めている。タブキギセルは前記のように, 模式産地は高山町・国見山であり分布も大隅半島に限られている。ナミハダギセルは模式産地が田代町で分布は宮崎県と鹿児島県南部に局限されている。アラナミギセルの模式産地は鹿児島市で, 分布はナミハダギセルと同様である。カドヒメベッコウの模式産地は日置郡市来町で, 分布は対馬, 大分県, 薩摩半島となっている。ヒゼンオトメマイマイの分布は五島列島となっており他地域からの報告はない。ギュリキギセルの模式産地は鹿児島で, 大分県, 熊本県, 宮崎県など九州を主産地とするが大阪府や静岡県清水市からの報告もある。九州南部に分布域をもつ上記5種の中, ヒゼンオトメマイマイ以外の4種は最初に鹿児島県で発見されたものである。

参考文献

- 東 正雄.1995. 原色日本陸産貝類図鑑[増補改訂版]. 343pp. 80図版, 保育社, 大阪
- 井出口 龍哉.1991.トカラ列島(鹿児島郡十島村)・平島の陸産貝.県立博物館研究報告(第10号)
- 神田正人.1992. 大分県陸産貝類誌. 84pp. 33図版, 佐伯印刷, 大分
- 黒田徳米.1963. 日本非海産貝類目録. 70pp. 日本貝類学会, 東京
- 富山清升.1983. トカラ列島・口永良部島の陸産貝類相. 南紀生物, 25(2):183-190, 和歌山
- 富山清升.1984. 宇治群島向島の陸産貝類相. Venus, 43(3):199-210, 日本貝類学会
- 波部忠重.1949. 九州地方陸産貝類採集記. ゆめ蛤, 45, 日八天狗社
- 波部忠重.1953. 九州最南端佐多岬の陸産貝類. 貝類学雑誌, 17(4):202-207, 日本貝類学会
- 肥後俊一・後藤芳央. 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. 886pp. エル貝類出版, 大阪
- 柗田 長.1930. 南九州枇杷島に於ける陸棲介類小見. Venus,1(5):193-194, 日本貝類学会
- 湊 宏.1988. 日本陸産貝類総目録. 294pp. 同日録刊行会. 和歌山
- 湊 宏.1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究. 211pp.74図版, 日本貝類学会, 東京
- 行田義三.1989. 三島村の貝. 九州の貝, 27-38, 九州貝類談話会
- 行田義三.1995. 下甌島の貝類相. 北薩の自然, 159-172, 鹿児島県立博物館
- 行田義三.1996. 徳之島の貝類. 奄美の自然, 145-152, 鹿児島県立博物館

(執筆著者：行田義三)

6 大隅半島の甲殻類相

(1) はじめに

今回の調査地区である大隅半島は、南東側の海岸線に沿って流れる黒潮の影響により亜熱帯、もしくは熱帯の様相を示している。これは、枇榔島の植生や佐多町沿岸の造礁サンゴなどに代表される。近年まで本地区においては陸上植物や昆虫の分布調査は比較的よく行われているが、陸水産甲殻類研究においては残念ながら空白地帯であった。ところが、1990年代になって本地区を対象とした研究が多く輩出され、その概要とともに陸水産甲殻類相からみた大隅半島の特徴が明らかにされた。

本報告では、大隅地区における陸水産甲殻類の地理的分布の概要を明らかにすることよりも、稲尾岳山系を主たる調査地域とし、ここより流れ出る複数の河川における陸水産甲殻類の流程分布を明確にすることを目的とした。さらに、その流程分布を規定する要因も検討した。

(2) 調査方法

稲尾岳山系に源を発する雄川および一ツ谷川を調査河川とした。調査は1996年8月8-9日に雄川全域を、同年10月28-29日に一ツ谷川および雄川の支流を調査した。雄川では3地点(TO-1~TO-3)においてトラップ(市販の小型エビ網)あるいはトラップとタモ網による採集を行い、4地点(NO-1~NO-4)においてタモ網もしくは叉手網による採集を行い、3地点(HO-1~HO-3)で手取りによる採集を行った(図-1)。一ツ谷川では、2地点(TH-

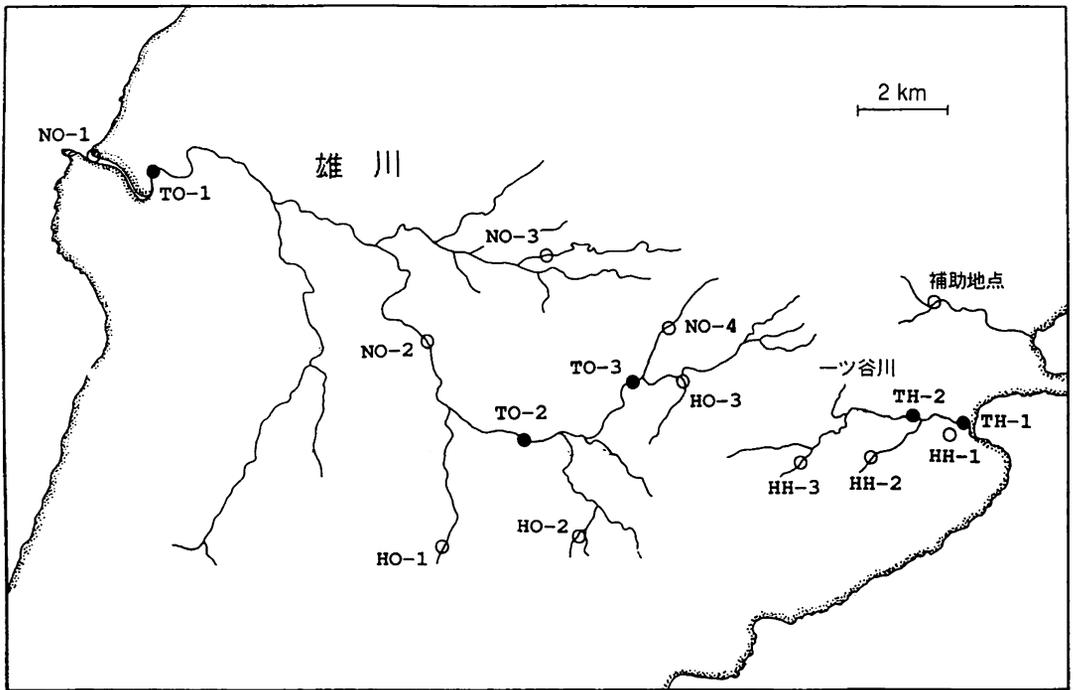


図-1 雄川および一ツ谷川における調査地点

1～TH-2)でトラップ(市販のちょうちん網)および叉手網による採集を行い、3地点(HH-1～HH-3)で手取りもしくは手取りと叉手網による採集を行った。

トラップの餌には魚肉を用い、トラップは夕方設置し一晩おいたあと翌朝回収した。タモ網及び叉手網は、網の上流約1mのところから足等で川床を攪乱して採集した。これを1地点で約10回行った。手取りによる採集は、石や倒木の陰などを中心に1回に1時間前後行った。

また、補助的に船間川と肝属川支流の渓流部で、サワガニ類の調査を目的として、手取りによる採集を行った。

(3) 調査地点の概要

TO-1およびTH-1は雄川と一ツ谷川の河口に近い下流域にあたるが、その景観はかなり異なっている(写真-1, 2)。両地点とも川床は砂泥底が主であるが、雄川のTO-1は川幅も広く、流れも緩やかで典型的な下流域の様相を示している。しかし、一ツ谷川のTH-1は川幅も狭く、砂泥底の川床には転石や巨岩が点在し一見中流の様相を呈する。これは川の規模と平地の大きさなど、地形の違いに起因すると考えられる(図2)。



写真-1 雄川河口域(TO-1)の景観



写真-2 一ツ谷川河口域(TH-1)の景観

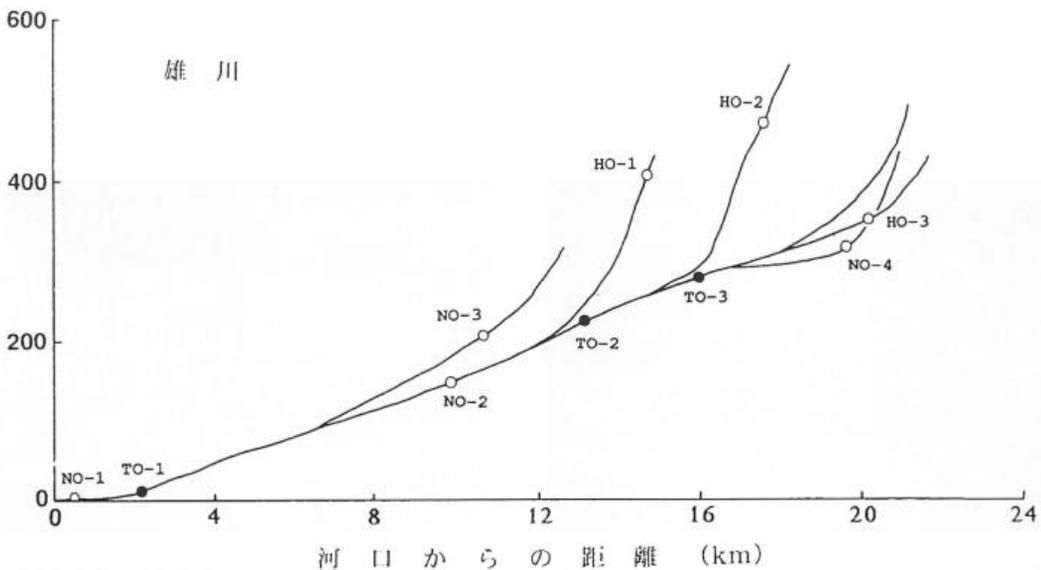


図-2 雄川の勾配断面

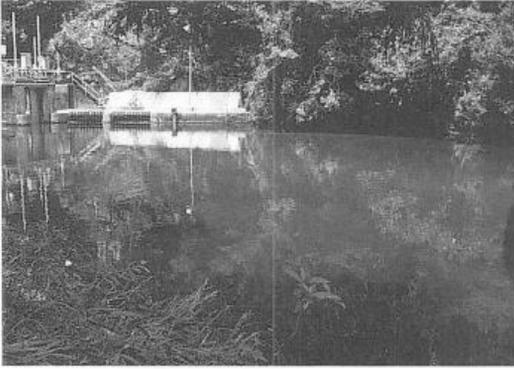


写真-3 雄川中流域(TO-2)の景観



写真-4 雄川中流域(TO-3)の景観

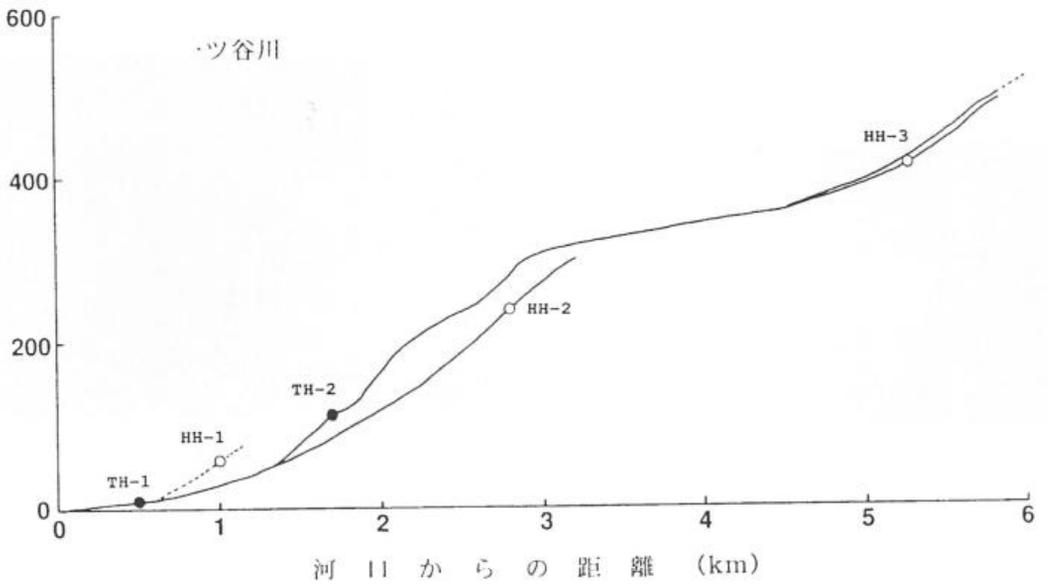


図-3 一ツ谷川の勾配断面



写真-5 一ツ谷川中流域(TH-2)の景観



写真-6 雄川河口域にみられるタテジマフジツボ

TO-2 および TO-3 は標高200~300mのところであり、中流域の様相を示し、川幅も狭くなり、早瀬もみられる(写真-3, 4)。ただ、TO-2の下流側には灌漑用の小型のダムが造られており、比較的深い淵が形成されている。また、TO-3にはコンクリート護岸も施されている。一方、TH-2はTO-2やTO-3よりも低い(標高約100m)ところにあるが(図-3)、その景観はむしろ上流的である(写真-5)。巨岩や大きな転石があり、瀬から淵への流れ込みは落差があり、小さな滝のようなになる。これは図-2および図-3より分かるように、一ツ谷川の流れの勾配が雄川のそれよりも急傾斜になっているためと思われる。

NO-1は雄川の河口に設定した。ここは汽水域にあたり海水の影響を強く受け、護岸や岩の表面にはタテジマフジツボが多数着生している(写真-6)。NO-2およびNO-3は標高100~200mの範囲にあり、その景観は中流域のTO-3に似ている。しかし、集落の近くに位置するため、治水灌漑の施設が造られており、3面コンクリートや小さな堰堤がそこに見受けられる(写真-7)。NO-4およびHO-1~HO-3は標高300~500mの比較的高い地域にあり、その景観は1蛇行区間に多くの瀬と淵がある渓流域の様相を示している(写真-8)。一方、HH-1~HH-3は50~400mの標高にあるが、HO地点と同じく渓流域の様相を示している。特に、河口から1kmで標高も50mたらずのところにあるHH-1が溪流の様相を示すのは、前述したように一ツ谷川が急勾配の流域をもつためと考えられる。

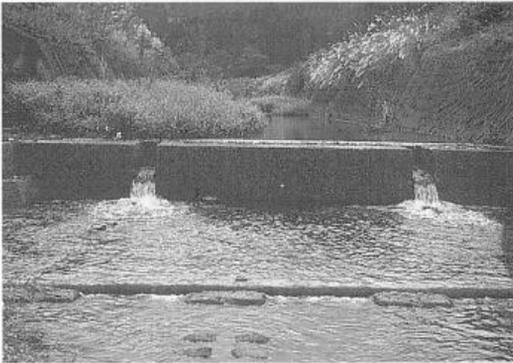


写真-7 雄川中流域(NO-3)の堰堤



写真-8 雄川上流域(NO-4)の景観

(4) 調査結果

今回の調査で採集された陸水産甲殻類は、4科6属9種で(表-1)、コエビ類のほとんどは一ツ谷川でのみ採集され、雄川では河口の1点(TO-1)においてのみ採集された。

河口から下流域(TO-1およびTH-1)に出現する甲殻類の種は比較的豊富で、ヌマエビ(口絵参照)、スジエビ(口絵参照)、ミナミテナガエビ、ヒラテナガエビ、モクズガニの5種が出現した。すべての種が鹿児島でふつうにみられる種であった。ヌマエビ、スジエビ、ミナミテナガエビの3種は、溪流の様相を示しながらも河口から1kmの距離にあるHH-1にも出現した。一方、ヒラテナガエビは河口域から中・上流域までの広い流域に分布していた。また、ヤマトヌマエビはヒラテナガエビとともに上流域の様相を示すTH-2に出現した。

一ツ谷川の急勾配とそこにおけるコエビ類の分布状況を考慮すると、一ツ谷川よりも勾配が緩やかな雄川の中・上流域(NO-1~NO-4, TO-2およびTO-3)において、淡水産コ

表-1 出現種および出現地点

種名	出現地点
ヌマエビ科 Atyidae	
ヌマエビ <u>Paratya compressa compressa</u>	TH-1, HH-1
ヤマトヌマエビ <u>Caridina japonica</u>	TH-2
テナガエビ科 Palaemonidae	
スジエビ <u>Palaemon paucidens</u>	TH-1, HH-1
ミナミテナガエビ <u>Macrobrachium formosense</u>	TO-1, TH-1, HH-1
ヒラテテナガエビ <u>Macrobrachium japonicum</u>	TH-1, TH-2
イワガニ科 Grapsidae	
モクズガニ <u>Eriocheir japonicus</u>	TO-1, TH-1
イワガニ科の一種	HH-1
サワガニ科 Potamidae	
サワガニ <u>Geothelphusa dehaani</u>	HO-1, HO-2, HO-3, TH-2, HH-1, HH-2, HH-3, 補助地点
ミカゲサワガニ <u>Geothelphusa exigua</u>	HO-1, HO-3, NO-4, TH-2, HH-2, HH-3, 補助地点

エビ類が今回まったく採集されなかったことは奇異に感じられる。ほとんどの淡水産コエビ類は両側回遊種で、その子どもは海で発育し、一般に勾配が緩やかな河川においては中・上流域まで遡上することができる。しかし滝やダム、大型の堰堤などが河川の途中にあるとこれらの構築物が遡上の際の障壁となる。この障壁を越える能力は種によって異なり、場合によってはコエビ類がまったく乗り越えられないこともある。このように治水灌漑施設が淡水産コエビ類の流程分布に影響することは十分考えられる。

また、外洋に面する一ツ谷川は南の島々からのコエビ類の子どもの供給を雄川より多く受けていることも考えられる。以上のように河川におけるコエビ類の流程分布は、河川の形態、人間による影響、および注ぎ込む海の性状などによって変化すると考えられる。

サワガニ類2種は中・上流域に出現した。川岸あるいは渓流域の石の下、ときには巣穴を掘って生息していた。多くの地点でサワガニとミカゲサワガニは混生していたが、サワガニが湿り気のある地域や道路側溝などでも採集されたのに対し、ミカゲサワガニのほとんどは水の中でのみ採集された。これは、両種の水に対する依存性の違いによるものと考えられる。この点については今後調査する必要がある。また、前述した色彩のことなるサワガニは今までの河川・流域でも混生することがなかった。しかし、今回鹿屋市の下祓川（肝属川の支流）において少数ではあったが赤色型と青色型が混生していた。この地域は両色彩型の生態を研究する上で重要な地点と考えられる。

イワガニ科の一種がサワガニとともにHH-1に出現した。形態は海岸域に普通にみられるフタバカクガニに類似していたが若干の差異が認められた。今後形態学的研究が必要と思われる。

(5) まとめ

今回の調査では4科6属9種の陸水産甲殻類が出現した。雄川と一ツ谷川の陸水産甲殻類相が若干異なることも示唆された。また、溪流部ではサワガニとミカゲサワガニが混生し、今回初めて色彩の異なるサワガニの混生する地域が確認された。

参考文献

- 鹿児島県立博物館.1992.調べよう鹿児島の自然(第5号).鹿児島県立博物館.鹿児島市
- 上田常一.1970.日本淡水エビ類の研究. 園山書店. 松江市.
- Minei,H.1973.Potamoid crabs of the Ryukyu Islands,with descriptions of five new species(Crustacea, Decapoda, Potamoidea). Journal of Faculty of Agriculture, Kyushu University, No.17.203-226.
- 鈴木廣志・津田英治.1991.鹿児島県におけるサワガニの体色変異とその分布.日本ベントス学会誌. 41.37-46
- Suzuki, H., Tanigawa, N., Nagatomo, T., & Tsuda, E. 1993 : Distribution of freshwater carideanshrimps and prawns(Atyidae and Palaemonidae)from Southern Kyushu and adjacent islands, Kagoshima Prefecture, Japan.Cruatacean Research. 22.55-64.
- 鈴木廣志・佐藤正典.1994.かごしま自然ガイド-淡水産のエビとカニ.西日本新聞社.福岡市
- Suzuki,H.&Tsuda,E.1994.A new freshwater crab of the genus *Geothelphusa* (Cruatacea : Decapoda : Brachyura : Potamidae) from Kagoshima Prefecture, Southen Kyushu, Japan. Proceedings of the Biological Society of Washington.107(2).318-324.
- (執筆者：鈴木廣志，黒江修一)

7 大隅半島南部の昆虫相

(1) 大隅半島南部の昆虫類 (1996年 8月)

① はじめに

1996年 8月 7日～9日の3日間、大隅半島の南部において昆虫類の調査を行ったのでここに報告する。今回は特に調査記録の少ない木場岳を中心に行なったが、ここも伐採されつつあるところもあり、早期に調査をしておく必要性を感じた。調査の対象はチョウ、ガ、トンボ、セミ、甲虫などで、夜間には灯火採集を実施した。調査の結果については下記の通りであるが、海浜性のハンミョウ類は過去記録のある所など数箇所注意して探したにもかかわらず発見できなかった。謝辞：調査にあたり桑山健一氏ら(8月7日～8日)の協力を得ることができた。紙面を借りて御礼申し上げる。

② 日程およびコース

a. 8月7日(水)：木場岳周辺昆虫類調査、根占町松ヶ迫にて夜間灯火採集

県立博物館出発(8:30)→桜島フェリー→根占町宿泊所着・調査打ち合せ他(10:40～11:30)
→木場岳林道～登山口(調査)→宿泊所着(18:30)・夕食→夜間灯火採集・根占町松ヶ迫(20:00～22:00)

b. 8月8日(木)：大隅半島東海岸部昆虫類調査、根占町木場岳林道にて夜間灯火採集

根占町宿泊所出発(8:35)→東海岸調査(境谷橋→大浦→杉山谷橋→打詰→辺塚)
(10:00～15:20)→宿泊所着(16:30)・夕食→夜間灯火採集・木場岳林道伐採地(19:00～22:00)

c. 8月9日(金)：大隅半島南部における海浜性ハンミョウ類調査

宿泊所出発(8:45)→海岸の砂浜でハンミョウ類調査(根占町宮田→佐多町島泊→佐多町田尻→佐多町大泊→佐多町間泊→佐多町浜尻→大根占町鳥浜)(9:00～14:00)→博物館着(17:00)

③ 調査者

福田晴夫、桑山健一、桑山渡羽早(中2)、桑山さやか(小4)、田原隆成(中2)、江平憲治

④ 調査結果

以下採集または目撃した種について列記するが、8月7日(根占町松ヶ迫：Aとする)、8月8日(木場岳林道：Bとする)に夜間灯火採集で得たものについては、種名(採集地、個体数)として記すことにする。なお夜間灯火採集は全員(および昆虫以外の調査班のメンバーも参加)で行なったので採集者名は省略する。セミの目撃記録とは鳴き声による確認記録である。

a. トンボ目

(a) ヤマイトトンボ科

キュウシュウトゲオトンボ；稲尾岳(7. viii, 1♂, 酒匂猛)

(b) カワトンボ科

ニシカワトンボ；田代町木場岳林道(7. viii, 1♂, 桑山)、田代町木場岳林道～登山口にある川(7. viii, 中齢幼虫1頭, 江平)

ハグロトンボ；内之浦町大浦(8. viii, 1♂, 桑山)

(c) サナエトンボ科

ヤマサナエ；田代町木場岳林道～登山口にある川(7. viii, 中齢幼虫3頭, 江平)

ダビドサナエ；田代町木場岳林道～登山口にある川(7. viii, 終齢幼虫4頭, 中齢幼虫

虫 7 頭, 江平), 佐多町杉山谷橋付近 (8 . viii, 終齡幼虫 1 頭, 江平)
チビサナエ; 佐多町杉山谷橋付近 (8 . viii, 羽化したばかりの未熟な 1 ♂, 桑山)
(8 . viii, 中齡幼虫 3 頭, 江平)

タイワンウチワヤンマ; 佐多町島泊 (9 . viii, 目撃, 福田)

(d) オニヤンマ科

オニヤンマ; 田代町木場岳林道 (7 . viii, 1 ♀, 桑山), 田代町木場岳林道～登山口にある川 (7 . viii, 中齡幼虫 3 頭, 江平), 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 ♂目撃, 江平)
ミナミヤンマ; 佐多町杉山谷橋付近 (8 . viii, 1 ♀目撃, 江平)

(e) ヤンマ科

ミルンヤンマ; 田代町木場岳林道～登山口にある川 (7 . viii, 中齡幼虫 2 頭, 江平)
コシボソヤンマ; 田代町大藤川瀬戸口橋付近 (7 . viii, 中齡幼虫 1 頭, 江平)

(f) ヤマトンボ科

タカネトンボ; 田代町木場岳登山口 (7 . viii, 1 ♂, 桑山), 田代町木場岳林道 (7 . viii, 1 頭目撃, 江平)

(g) トンボ科

シオカラトンボ; 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 ♂, 桑山) (8 . viii, 1 ♂, 江平), 佐多町島泊 (9 . viii, 目撃, 福田)

ナツアカネ; 田代町木場岳登山口 (7 . viii, 1 ♀, 江平), 田代町木場岳林道 (7 . viii, 2 ♂ 2 ♀, 福田) (7 . viii, 1 ♂ 2 ♀, 江平), 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 ♂, 桑山) (8 . viii, 1 ♂, 江平)

マユタテアカネ; 田代町木場岳林道 (7 . viii, 1 ♀, 福田) (7 . viii, 2 ♂ 4 ♀, 桑山) (7 . viii, 1 ♂ 1 ♀, 江平), 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 ♂, 桑山)

ネキトンボ; 田代町木場岳登山口 (7 . viii, 1 ♀, 江平)

ハネビロトンボ; 佐多町島泊 (9 . viii, 目撃, 福田)

ウスバキトンボ; 各地で多数目撃

b. チョウ目 (チョウ類)

(a) セセリチョウ科

アオバセセリ; 内之浦町橋 (8 . viii, 少数目撃, 福田)

イチモンジセセリ; 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 ♂, 他にも普通に目撃, 福田), 内之浦町杉山谷橋 (8 . viii, 少数目撃, 福田)

(b) アゲハチョウ科

ジャコウアゲハ; 木場岳林道, 登山口 (7 . viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町橋 (8 . viii, 普通に目撃, 福田)

アオスジアゲハ; 木場岳林道 (7 . viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町大浦 (8 . viii, 少数目撃, 福田)

モンキアゲハ; 木場岳登山口 (7 . viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町大浦 (8 . viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町境谷橋 (8 . viii, 少数目撃, 福田)

クロアゲハ; 木場岳林道 (7 . viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町橋 (8 . viii, 普通に目撃, 福田)

(c) シロチョウ科

キチョウ；木場岳林道（7 . viii, 少数目撃, 福田）, 内之浦町大浦（8 . viii, 1 ♂, 福田）,
内之浦町境谷橋（8 . viii, 少数目撃, 福田）

ツマグロキチョウ；木場岳林道入口（7 . viii, 少数目撃, 福田）

ツマベニチョウ；内之浦町大浦（8 . viii, 少数目撃, 福田）

(d) シジミチョウ科

ヤマトシジミ；木場岳林道入口（7 . viii, 少数目撃, 福田）, 内之浦町大浦（8 . viii, 1 ♂,
他にも普通に目撃, 福田）

(e) マダラチョウ科

アサギマダラ；木場岳林道（7 . viii, 少数目撃, 福田）

(f) タテハチョウ科

ツマグロヒョウモン；木場岳登山口（7 . viii, 少数目撃, 福田）

アカタテハ；佐多町打詰（8 . viii, 少数目撃, 福田）

アオタテハモドキ；内之浦町大浦（8 . viii, 2 ♂ 2 ♀, 1 頭目撃, 福田）（8 . viii, 1 ♂
2 ♀, 桑山）

※水田（早期栽培, 稲刈りのあと）にて採集。本年は県内各地で多数発生した。

タテハモドキ；佐多町辺塚（8 . viii, 2 頭, 桑山）

スミナガシ；木場岳林道入口（7 . viii, 少数目撃, 福田）（7 . viii, 2 頭, 桑山）

(g) ジャノメチョウ科

ヒメウラナミジャノメ；木場岳林道（7 . viii, 1 ♂, 福田）, 内之浦町大浦（8 . viii, 少
数目撃, 福田）

コジャノメ；木場岳林道（7 . viii, 少数目撃, 福田）, 木場岳登山口（7 . viii, 少数目撃,
福田）

c. チョウ目（ガ類）

(a) メイガ科

クロヘリキノメイガ（B, 1 頭）, トビヘリキノメイガ（B, 2 頭）, モンキクロノメイ
ガ（B, 8 頭）, フタスジツヅリガ（B, 1 頭）

(b) シャクガ科

ハスオビトガリシャク（B, 1 頭）, ウスアオシャク（B, 1 ♂ 1 ♀）, ビロードナミシャ
ク（7 . viii, 1 頭, 木場岳にて昼に採集, 福田）, ツマグロエダシャク（B, 1 頭）, クロ
フシロエダシャク（B, 2 頭）, ハラゲエダシャク（B, 1 頭）, ミスジツマキエダシャク
（B, 2 頭）

(c) スズメガ科

クルマスズメ（B, 6 頭）

(d) ヒトリガ科；スジベニコケガ（B, 1 頭）

(e) ヤガ科

フタスジヨトウ（B, ?）, マエグロシラオビアカガネヨトウ（B, 2 頭）, オオシマカ
ラスヨトウ（B, 1 頭）, ノコメセダカヨトウ（B, 1 頭）, マダラツマキリヨトウ（B,
5 頭）, ミドリリング（B, 4 頭）, イチジクキンウワバ（B, 1 頭）, オオウンモンク
チバ（B, 1 頭）, モンムラサキクチバ（B, 1 頭）, オオトモエ（B, 4 頭）, ハガタクチ
バ（B, 1 ♀）, ナカジロシタバ（B, 2 頭）, シャクドウクチバ（B, 1 頭）, フジロアツ

バ (B, 29頭), ニセフジロアツバ (B, 3頭), オオシラホシアツバ (B, 1♂1♀), シロテンムラサキアツバ (B, 1頭), オオアカマエアツバ (B, 5頭)

d. カメムシ目

(a) ツチカメムシ科

ヒメツチカメムシ; (B, 1頭)

(b) カメムシ科

チャバネアオカメムシ; (B, 1頭)

(c) オオホシカメムシ科

ヒメホシカメムシ; (B, 1頭)

オオホシカメムシ; (B, 1頭)

(d) セミ科

ニイニイゼミ; 木場岳林道～登山口 (7. viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町大浦 (8. viii, 普通に目撃, 福田), 佐多町打詰 (8. viii, 少数目撃, 福田), 佐多町馬込出口 (9. viii, 目撃, 福田), (B, 1♂2♀)

クマゼミ; 根占町根占 (8. viii, 多数目撃, 福田), 根占町宮田 (9. viii, 目撃, 福田)
佐多町島泊 (9. viii, 普通に目撃, 福田), 佐多町田尻 (9. viii, 普通に目撃, 福田)
佐多町大泊 (9. viii, 目撃, 福田), 佐多町間泊 (9. viii, 目撃, 福田), 佐多町馬込出口 (9. viii, 目撃, 福田)

アブラゼミ; 木場岳林道～登山口 (7. viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町大浦 (8. viii, 普通に目撃, 福田), 佐多町打詰 (8. viii, 少数目撃, 福田), 佐多町島泊ダム (9. viii, 少数目撃, 福田), 佐多町馬込出口 (9. viii, 目撃, 福田)

ヒメハルゼミ; 木場岳林道～登山口 (7. viii, 少数目撃, 福田)

ヒグラシ; (B, 2♀)

ミンミンゼミ; 木場岳断崖の森 (7. viii, 少数目撃, 福田)

ツクツクボウシ; 木場岳林道～登山口 (7. viii, 少数目撃, 福田), 内之浦町大浦 (8. viii, 普通に目撃, 福田), 佐多町打詰 (8. viii, 少数目撃, 福田)

クロイワツクツク; 佐多町島泊 (9. viii, 少数目撃, 福田), 佐多町田尻 (9. viii, 少数目撃, 福田)

e. コウチュウ目

(a) オサムシ科

アトボシアオゴミムシ; (B, 2頭)

(b) シデムシ科

クロシデムシ; (B, 1頭)

オオモモブトシデムシ; (A, 1♀) (B, 5♂4♀)

(c) ゲンゴロウ科

ヒメゲンゴロウ; 田代町大藤川瀬戸口橋付近 (7. viii, 1頭, 江平)

(d) クワガタムシ科

ミヤマクワガタ; (B, 1♂)

ノコギリクワガタ; (A, 1♀), 佐多町辺塚 (8. viii, 2♀, 江平), (B, 1♂4♀)

コクワガタ; (B, 1♂1♀)

- ヒラタクワガタ ; (B, 1 ♂)
- (e) コガネムシ科
 センチコガネ ; 木場岳登山口 (7 . viii, 1 頭, 江平)
 ゴホンダイコクコガネ ; (B, 1 ♂)
 サツマコフキコガネ ; (B, 2 ♂ 2 ♀)
 ナガチャコガネ ; (B, 1 5 頭)
 オオカンショコガネ ; (B, 1 頭)
 ヒメビロウドコガネ ; (B, 2 頭)
 オオビロウドコガネ ; (B, 3 頭)
 スジコガネ ; (A, 1 頭), (B, 1 頭)
 アオドウガネ ; (A, 7 頭), (B, 1 頭)
 ドウガネブイブイ ; (B, 3 頭)
 カブトムシ ; (A, 1 ♂ 7 ♀)
- (f) タマムシ科
 ヤマトタマムシ ; 内之浦町大浦 (8 . viii, 3 頭, 桑山)
- (g) カッコウムシ科
 イガラシカッコウムシ ; (B, 1 頭)
 ツマグロツツカッコウムシ ; (B, 2 頭)
- (h) ケシキスイ科
 ヨツボシケシキスイ ; (B, 1 頭)
- (i) ゴミムシダマシ科
 モンキゴミムシダマシ ; (B, 2 頭)
- (j) カミキリムシ科
 ノコギリカミキリ ; 佐多町辺塚 (8 . viii, 1 ♂, 江平), (B, 3 ♂)
 フタオビミドリトラカミキリ ; (B, 2 頭)
 ヨツスジトラカミキリ ; (B, 1 頭)
 ビロウドカミキリ ; (B, 1 ♂)
 クワカミキリ ; 木場岳林道 (7 . viii, 2 頭, 江平), 木場岳 (8 . viii, 3 頭, 桑山)
- f. バッタ目
- (a) バッタ科
 マダラバッタ ; 佐多町打詰 (8 . viii, 1 ♀, 福田)
 フキバッタs p. ; 木場岳 (7 . viii, 2 ♀, 福田)
 ハネナガヒシバッタ ; 佐多町打詰 (8 . viii, 1 頭, 福田)
- (b) キリギリス科
 ヘリグロツユムシ ; 木場岳 (7 . viii, 1 ♂ 1 ♀, 福田)
- (c) マダラゴキブリ科
 サツマゴキブリ ; 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 頭, 桑山)
- g. ハチ目
- (a) スズメバチ科
 キイロスズメバチ ; 内之浦町大浦 (8 . viii, 1 頭, 福田)

- (b) ジガバチ科
ルリジガバチ；内之浦町大浦（8 . viii, 1 頭, 桑山）
- (c) コシブトハナバチ科
クマバチ；内之浦町大浦（8 . viii, 1 頭, 福田）

(2) 大隅半島南部のトンボ類（1996年10月）

① はじめに

1996年10月10日～12日の3日間、大隅半島の南部においてトンボ類を中心に調査を行ったのでここに報告する。今回の調査は10月であったため、成虫ではアカネ類が多く、特にナツアカネが広く各地に分布し個体数も多かった。また、内之浦町姫門ではミヤマアカネが多く、10月中旬というのにまだ羽化間もない個体が多数飛び立つようすが見られた。河川ではトンボの幼虫の採集を行ない分布等を調べた。

謝辞：調査にあたり笹原節男氏に同行いただき協力していただいた。紙面を借りて御礼申し上げます。

② 日程及びコース

- 10月10日（天候：晴れ） 佐多町（伊座敷→島泊→佐多岬→若荷の迫）
- 11日（天候：曇り） 佐多町（辺塚）→内之浦町（岸良→姫門）→高山町（花牟礼）
- 12日（天候：曇り時々雨） 高山町（本城→川上→岩屋）→内之浦町（姫門）

③ 調査者

笹原節男 江平憲治

④ 調査結果

a. トンボ目

(a) イトトンボ科

コフキヒメイトトンボ

内之浦町姫門（11～12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平）

リュウキュウベニイトトンボ

内之浦町姫門（11～12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平）

アオモンイトトンボ

佐多町若荷の迫（10 . x, 1♀, 江平）

内之浦町姫門（11～12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平）

高山町花牟礼池（11 . x, 多数目撃, 笹原, 江平）

クロイトトンボ

内之浦町姫門（11～12 . x, 少数目撃, 笹原, 江平）

(b) モノサシトンボ科

モノサシトンボ

内之浦町姫門（11～12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平）

(c) カワトンボ科

ハグロトンボ

高山町本城（12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平）

高山町川上（12 . x, 普通に目撃, 江平）

ニシカワトンボ

佐多町洞ヶ原 (11 . x, 中齡幼虫2頭, 江平)

(d) サナエトンボ科

ヤマサナエ

佐多町上之原 (11 . x, 中齡幼虫1頭, 若齡幼虫3頭, 笹原, 江平)

高山町本城 (12 . x, 終齡幼虫2頭, 中齡幼虫2頭, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 終齡幼虫1頭, 中齡幼虫6頭, 笹原, 江平)

アオサナエ

高山町本城 (12 . x, 中齡幼虫2頭, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 江平)

ダビドサナエ

佐多町洞ヶ原 (11 . x, 終齡幼虫3頭, 中齡幼虫14頭, 笹原, 江平)

高山町本城 (12 . x, 中齡幼虫2頭, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 江平)

オジロサナエ

高山町本城 (12 . x, 終齡幼虫2頭, 中齡幼虫2頭, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫4頭, 笹原, 江平)

チビサナエ

佐多町洞ヶ原 (11 . x, 中齡幼虫6頭, 笹原, 江平)

コオニヤンマ

高山町本城 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 笹原)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 笹原)

高山町岩屋 (12 . x, 終齡幼虫1頭目撃, 江平)

(e) オニヤンマ科

オニヤンマ

高山町本城 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 笹原)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 江平)

佐多町上之原 (11 . x, 中齡幼虫3頭, 江平)

ミナミヤンマ

佐多町洞ヶ原 (11 . x, 終齡幼虫1頭, 中齡幼虫4頭, 笹原, 江平)

(f) ヤンマ科

コシボソヤンマ

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫1頭, 笹原)

ミルンヤンマ

佐多町洞ヶ原 (11 . x, 中齡幼虫1頭, 江平)

ギンヤンマ

佐多町伊座敷 (10 . x, 1♂目撃, 江平)

(g) ヤマトンボ科

コヤマトンボ

高山町本城 (12 . x, 終齡幼虫2頭, 中齡幼虫7頭, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 中齡幼虫4頭, 笹原, 江平)

(h) トンボ科

シオカラトンボ

佐多町若荷の迫 (10 . x, 1♂1♀, 江平)

オオシオカラトンボ

佐多町若荷の迫 (10 . x, 3♂1♀, 江平)

コフキトンボ

高山町花牟礼 (11 . x, 2♂目撃, 江平)

ショウジョウトンボ

佐多町若荷の迫 (10 . x, 2♂, 江平)

タイリクアカネ

佐多町若荷の迫 (10 . x, 1♂, 他に1頭目撃, 江平)

ナツアカネ

佐多町伊座敷西方 (10 . x, 普通に目撃, 笹原)

佐多町島泊 (10 . x, 2♂, 江平)

佐多町佐多岬 (10 . x, 10頭位目撃, 笹原, 江平)

佐多町若荷の迫 (10 . x, 1♂, 笹原, 江平)

佐多町洞ヶ原 (10 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

佐多町上之原 (11 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

内之浦町岸良 (11 . x, 普通に目撃, 江平)

内之浦町姫門 (11~12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

高山町本城 (12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

マユタテアカネ

佐多町伊座敷 (10 . x, 1♂1♀, 江平)

佐多町若荷の迫 (10 . x, 多数目撃, ただし♀が多い, 笹原, 江平)

内之浦町姫門 (11~12 . x, 普通に目撃, 江平)

高山町本城 (12 . x, 普通に目撃, 笹原, 江平)

高山町川上 (12 . x, 普通に目撃, 江平)

ヒメアカネ

内之浦町姫門 (11 . x, 普通に目撃, 江平)

ミヤマアカネ

内之浦町姫門(11~12 . x, 多数目撃, 羽化したばかりの未成熟個体も多い, 笹原, 江平)

コノシメトンボ

佐多町若荷の迫 (10 . x, 1♀, 笹原)

内之浦町姫門 (12 . x, 1♀目撃, 江平)

アメイロトンボ

高山町花牟礼 (11 . x, 1♂目撃, 笹原, 江平)

ウスバキトンボ

各地で多数目撃, 佐多岬の海岸付近では特に多かった。

(執筆: 江平憲治)

8 稲尾岳周辺の両生・爬虫類相

(1) 両生綱

① 有尾目 (サンショウウオ目)

大隅に生息する有尾目には、ベッコウサンショウウオ、ブチサンショウウオ、ニホンイモリの3種がある。今回の稲尾岳周辺の調査では、そのうち、ブチサンショウウオ、ニホンイモリの2種が確認された。

a ブチサンショウウオ (サンショウウオ科)

分布域が広く、形態・色彩・斑紋には変異が多い。典型的な個体では、背面は紫がかった黒褐色の地に銀灰色の斑紋が不規則に点在する。

普通、標高300~700mの丘陵地に多い。稲尾岳の調査では、林道から5分程の標高630m地点から、標高860mの「川の源」まで、ほとんどの沢で幼生を確認した。また花瀬地区の標高450mの地点でも幼生を1個体確認した。稲尾岳に限らず、周辺の山地に広く生息するものと思われる。

残念ながら、今回の調査では成体を確認できなかったが、稲尾岳の個体群については、大分県の佐藤真一氏によって、他地域との著しい形態の違いが指摘され、現在、京都大学の松井正文氏らが、他地域の個体群との比較研究を行なっている。

b ニホンイモリ (イモリ科)

日本の有尾目の中で最も一般的な種であろう。毒々しいまでの赤い腹部が特徴で、「あかはら」という地方名もある。ニホンイモリは通常標高の低い田圃や溜め池、湿地などに生息するが、8月の調査で、稲尾岳山頂付近、標高約900mの地点で雌の成体1匹を目撃した。周辺にはニホンイモリが好みそうな止水の水場はなく200mほど離れたところに細い沢があるだけであった。この個体が、この沢で発生したのか、より高度の低いところから移動してきたのかはわからないが、成体になっても水中で生活することの多いニホンイモリとしては、かなり特異な生息環境といえる。



ニホンイモリ

標高300mの低地(磐山地区)の溜め池でも雌の成体を1個体確認。聞き取り調査では最近は昔より少なくなったものの、毎年相当数目にするとのことであった。

② 無尾目 (カエル目)

今回の調査では、ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、ニホンアカガエル、タゴガエル、ツチガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエルの7種を確認した。ヤマアカガエル、カジカガエルについては生息していると考えられるが、確認はできなかった。

a 日本ヒキガエル (ヒキガエル科)

本種には、「ドンコビツ」という鹿児島地方独特の地方名があるが、この語感に表れているように、一般にあまりいい印象はもたれていないようである。体長は6~15cmと大型で、他の

カエル類と比べて跳躍力が弱く、動作が鈍い。それを補うかのように、後頭部に一对の耳腺が発達しており、毒液を分泌する。天敵に出会うと、腰を高く持ち上げて頭を下げるという独特の防御姿勢をとる。

棲息地の高度の幅は広く、海岸近くから、1900mの高地にまで及ぶ。稲尾岳でも、平地だけでなく、標高800mの山中で成体が1個体目撃された。ニホンアカガエル等と比べて変態サイズが小さく、死亡率が高いのか、個体数はそれほど多くないようである。

b ニホンアマガエル (アマガエル科)

本種は緑色をした小型のカエルで、日本のカエルの中で最も親しまれている種類であろう。一見よく似たアオガエル科のシュレーゲルアオガエルとは、鼻孔から鼓膜にかけて黒い筋模様があることで外見から区別できる。また捕獲して腹面を見ると、本種には前足の付け根を結ぶ線に皮膚のしわがある。

花瀬地区、磐山地区における夜間調査では、道路、側溝、街灯の下、自動販売機の上などでも多数見られた。自動販売機の光に集まってきたガの仲間を捕食している個体も見られた。シュレーゲルアオガエルよりも人里近くにすみ、目につきやすいせいもあるのだろうが、個体数はかなり多いという印象を受けた。

c ニホンアカガエル (アカガエル科)

平地に普通に見られる体のスマートなカエルで、体色はかなり変化があるが、ふううは赤褐色をしているためアカガエルと呼ばれる。本土産のカエルの中では最も早く、早春に水田に産卵する。アカガエル類中最も吻部が長く、とがっている。近縁のヤマアカガエルとは、目の後方からのびて体側を走る一对の隆起(背側線)が、上面から見ても側面から見てもほとんど曲がらないことで区別できる。

稲尾岳周辺においては、山地では同じアカガエル科のタゴガエルが多いのに対して、平地～丘陵地では本種が最も多い。タゴガエルの採集最低標高は530m、本種の採集最高標高は450mであり、両種の混生は見られなかった。両種はかなりはっきりとすみわけているように思われる。

8月の夜間調査では道路上に相当数の幼体が出現しており、特に雨の後などは車の走行を妨げるほど集中している場所もあった。10月26日の夜間調査でも、15度という低い気温にもかかわらず、道路横の草むらを徘徊中の個体を目撃した。



ニホンアカガエル

d ヤマアカガエル (アカガエル科)

本種は、ニホンアカガエルによく似ているが、少し大きく、吻部が丸みを帯びる。背側線は上面から見ても側面から見ても折れ曲がり、カーブを描く。本来なら、丘陵地でニホンアカガエルと混生し、山地でも一部タゴガエルと混生するが、稲尾岳周辺では全く観察されなかった。そのため、前述のとおりニホンアカガエルとタゴガエルの分布の違いが際立ったのであろう。

本種は北海道を除く日本全国に分布している種であり、大隅半島でももちろん記録がある。生息が確認されなかったのは調査地域が限られていたためであろうが、少なくとも稲尾岳周辺

では、生息していても個体数はかなり少ないものと思われる。

e タゴガエル（アカガエル科）

ヤマアカガエルと混同されるが、本種は小型で、頭部が扁平で幅広い。また、上唇と下顎に黒褐色の斑点が分布し、腹面から見ると下顎全体がかなり黒っぽく見え、この点で本邦産の他のアカガエル類とは容易に区別がつく。山地の小さな溪流近くの森林に生息し、本州では2000m級の高地にまで分布する。

九州では11月頃から繁殖し、地中の伏流水等に産卵する。卵は大きく、幼生は卵黄の栄養分だけで変態することができる。幼生の餌となる藻類の少ない小さな溪流に適応した例として非常に興味深い。

稲尾岳では標高530mの地点から、山頂直下標高900mの地点まで、いたる所で目撃した。同山中では他のアカガエル類は発見されず、山中で捕獲・観察した小型のカエルは全てタゴガエルであった。全ての調査で成体・幼体共に確認され、個体数はかなり多いようである。

f ツチガエル（アカガエル科）

本種は俗に“イボガエル”と呼ばれるとおり、背中から四肢にかけて大小のイボ状隆起に覆われている。体色はまさしく土色で、体表のイボとあいまって見事な保護色になっている。

本土産のカエル類の多くは、秋までに変態して成体で越冬するが、本種では幼生で越冬することが知られている。また成体が越冬する場合も、他のカエル類が水辺の土の中で越冬するのに対して、幼生と共に水中の泥の中で越冬することが多い。

稲尾岳周辺では、ニホンアカガエルと同じく平地で見られたが、磐山地区の溜め池周辺や、雄川の川原など、水辺に限られ、林の中や藪等に棲むニホンアカガエルとは住み分けが見られる。

g ヌマガエル（アカガエル科）

本種は東南アジアに広く分布するが、日本本土では暖地にしか見られない。背中にはイボ状の隆起があるが、ツチガエル程ではなく、腹が白いことでツチガエルとは容易に区別できる。背中線に白い筋模様の表れる個体と、これを欠く個体の2つのタイプがあり、出現率は地域によって異なる。

稲尾岳周辺ではあまり多くは見られなかった。花瀬公園近くの田圃で観察した個体は、背中線に筋模様のあるタイプであった。

h シュレーゲルアオガエル（アオガエル科）

雄は色彩がニホンアマガエルに似ているため、しばしば混同されるが、鼻孔から鼓膜にかけての黒い筋模様がないこと、背面に暗色の斑紋を持たないことなどで区別できる。雌は体が5～6cmと大きく、体色もやや暗い緑色のため、混同されることは少ない。

低地から山地まで広く生育するが、稲尾岳の山中では確認できなかった。8月の夜間調査において、磐山地区の公園（標高約250m）の脇の草むらで数個体を目撃した。また、その周辺の舗装道路でも雌雄1個体ずつを目撃した。ニホンアマガエルが目につきやすい所に多数出現していたのに対して、本種は舗装道路の2個体を除いて、見付けるのが困難であった。個体数はそれほど多くないと思われる。

(2) 爬虫綱

① カメ目

大隅で確認されている陸水系のカメ類は、ヌマガメ科のクサガメ、イシガメ、スッポン科のニホンスッポンの3種である。稲尾岳周辺では、生息の確認はできず、聞き取り調査でも現在は見られないとの回答がほとんどであった。目撃情報もあったが、種の特定はできなかった。さらなる調査が必要である。

② 有鱗目(トカゲ亜目)

大隅で確認されているトカゲ類は、ヤモリ科のニホンヤモリ、アガマ科のニホントカゲ、カナヘビ科のニホンカナヘビの3種である。

a ニホンヤモリ(ヤモリ科)

本種は人家にもすみつく馴染みの深い爬虫類で、一部の地域では、ヤモリ＝「家守」として大切にしている。ハエやカ、ゴキブリなどの住居害虫を餌にしているのだから、確かに家の守り神としての役割は果たしているのかもしれない。

全長は10～12cmで、体色は灰褐色であるが、環境の明暗に応じて濃淡が変化する。背面には不規則な暗色斑紋をそなえるが、変異が多い。四肢の各指の裏側には細かな吸盤が無数に密生し、天井やガラス窓を自由に走り回ることができる。

現地調査では、生きた個体を確認することはできなかったが、聞き取り調査によれば、古い家では夜、天井などで時々見かけるとの事であった。

九州南部には、本種の1タイプとして、主に野外の森林などにすむ別系統と思われる個体群が知られており、稲尾岳周辺でもさらに調査が必要である。

b ニホントカゲ(アガマ科)

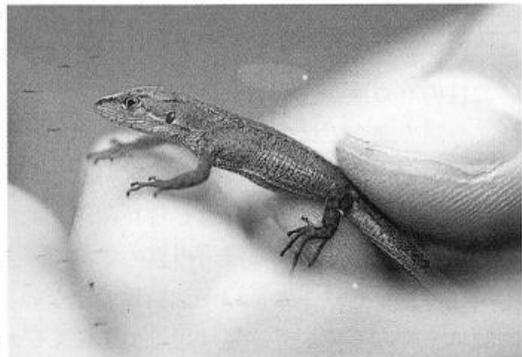
国後島から大隅諸島まで、ほぼ日本全土に分布し、人家の庭先にもすみ普通のとカゲ。体は円筒形で太く、体色は成体では一様に茶褐色の金属光沢となり、胴側部に幅広い黒色の筋模様がある。幼体では黒地に黄白色の5本の筋模様があり尾は鮮やかな青色をしている。

内之牧林道の脇で日光浴をしている成体を2個体目撃。また、稲尾岳上部の「川の源」付近で、尾に青色の残る亜成体を1個体目撃した。確認できたのはこの3個体のみであった。

c ニホンカナヘビ(カナヘビ科)

本種は、ニホントカゲと比べて体が細く、スマートな印象を受ける。尾は非常に長くて、全長の3分の2におよぶ。体表の鱗は光沢がなく、がさついている。背面は地味な褐色で、雄では体側に黒い縦条がある。ニホントカゲと共に全国に分布し、平地から低山地の草原・やぶなどにすみ。人家の庭先でもよく目にする。

内之牧林道周辺では、ニホントカゲと同所的に混生していた。8月の調査では林道脇の林床と林道沿いの石の上で成体を1個体ずつ目撃し、11月の調査では、同じく内之牧林道沿いの草むらで幼体を捕獲した。一般のニホンカナヘビの幼体と比べて体色はかなり赤味が強く、後肢には赤褐色の地に黒い斑紋があった。今後詳しく調べてみたい種類である。



ニホンカナヘビ

③ 有鱗目（ヘビ亜目）

今回の現地調査および、聞き取り調査によって確認されたヘビ目は以下の5種であったが、記録としてはこれらに加えてジムグリ、シロマダラがある。またタカチホヘビも生息の可能性はある。

a シマヘビ（ナミヘビ科）

日本ではアオダイショウ、ヤマカガシと共に最もよく知られたヘビである。全長1~1.5mの中型で、体色は黄褐色の地色に明瞭な4本の黒い筋模様が入るためシマヘビと呼ばれる。鹿児島地方には、体色が完全に黒化した通称“カラスヘビ”もみられる。平地から低山にすみ、気性は荒く、カエル、トカゲ等の小動物を餌とする。

8月11日に佐多町の林道で成体を1個体目撃した。また、11月10日に稲尾岳登山口近くの内之牧林道で、車にひかれたものと思われる死後間もない死体を1個体目撃した。全長66.5cm、頭胴長51.5cm、体重約50gの中型の個体であった。

b アオダイショウ（ナミヘビ科）

本種は本邦産ヘビ類の最大種で、全長3mに達する。体色は青味がかったオリーブ褐色で、不明瞭な暗褐色の縦条がある。平地から低山地の耕地・堤などにすみ、人家や倉庫などにもすみつくヘビとして、一般にも馴染みが深い。

8月の夜間調査において、花瀬地区の舗装道路上で車にひかれた死体を1個体目撃した。全長70cmほどの小型の個体であった。

c ヒバカリ（ナミヘビ科）

全長50cm前後と小型で、体は細長く、華奢な感じがする。性質も極めておとなしく、捕まえてポケットに入れると、丸くなってじっとしている。日本産のヘビの中で、最も好感の持てる優雅なヘビである。体色は、背面が茶褐色、腹面は黄色地に暗色の小斑点がある。頸部には斜行する黄色の筋模様があり、腹面の模様と共に本種の識別点となっている。

8月8日の夜間調査で、雨の中、舗装道路を横断中の本種を発見し、捕獲した。濡れた道路に多数出現したアカガエルの幼体を捕食しようとしていたのかもしれない。活動期のため、捕獲時にはかなり抵抗したが、体温が心地良いのか、胸ポケットに入れるとおとなしくなった。翌日写真を撮り、計測をして、捕獲した場所の近くに放した。全長53cmの成体であった。

d ヤマカガシ（ナミヘビ科）

本種は日本ではごく普通のヘビである。胴はやや太く、体色は赤~黄褐色の地色に黒色の斑点があるものが一般的だが、体色には変異が多い。毒牙は持たず毒蛇とは呼べないかもしれないが、特殊なケースとして非常に深く噛まれた場合、上顎の奥歯から、耳下腺でつくられる出血性の有毒液が注入され、体質によっては出血が止まらないので注意が必要である。

今回の調査では生息を確認できなかったが、聞き取り調査によると、農地の周辺には昔ほどではないが、まだ普通に生息しているということであった。

e ニホンマムシ（クサリヘビ科）

日本全土に分布する唯一の真の毒蛇で、全長45~77cmと小型ながら、毒性は強い。致命率は現在では1%以下と低いのが油断はできない。頭部は長三角形で頸部のくびれは明瞭である。胴はやや太くて短く、尾は短くて急にくびれる。胴には特徴的な銭形の斑紋があり、林床や藪などで静止していると保護色となって見分けにくいいため注意が必要である。

11月9日に行った夜間調査では、花瀬地区の道路工事現場の脇で成体を1個体確認すること

ができた。気温が低かったため動きは鈍かったが、撮影をしようとして接近すると、体を折り曲げて威嚇姿勢をとった。本種には体色が茶褐色のタイプと、まれに赤みを帯びるタイプ（いわゆる“赤まむし”）があるが、確認した個体は茶褐色のタイプであった。また、周辺の聞き取り調査では、農家の人でさえ1年に1～2回見る程度だという。個体数の減少が心配される。

（執筆者：小溝克己）



ニホンマムシ

9 稲尾岳で観察した鳥類

(1) 調査方法

現地調査は2回行った。第1回目の調査は1996年8月8日に、第2回目の調査は1996年11月9日から翌10日わたってそれぞれ行った。調査の場所は雄川水系花瀬から稲尾岳山頂にかけての範囲である。花瀬では定点観察のみによる記録をした。そこから稲尾岳北側登山道入り口までは往復、自動車で移動し移動中に観察した鳥類を記録した。稲尾岳山頂付近では北側登山道入り口で定点観察および所崎香織氏の協力をいただき、標識調査を行い捕獲個体の計測、標識放鳥を行った。また登山道では北側登山口から山頂付近までロードサイドカウント法を行い、目識および鳴き声により識別した種を記録した。以下にその記録を示すものである。

(2) 結果

今回の2回の調査で観察した鳥類は7目21科38種におよぶ。そのうちすべてが調査回数のかかなり多い高隈山系の記録にみられる。過去の資料（鹿児島大学野鳥研究会資料、堀 浩明氏私信、鹿児島島の野鳥／1987）の鳥種と重複している。今回観察した鳥類を稲尾岳の鳥類リストとして表1にまとめた。また標識放鳥した鳥類はアカハラ、アオジの2種類2羽で、その計測結果は同2種の in hand で撮影した写真を貼布して表2に記した。

但し、表1中には今回調査中には観察できなかったが同地域の爬虫類・両生類を調査した小溝克己氏の前記日程以外に観察した種も含み、これには別途※印を付与して記載している。

(3) 摘要

鹿児島県はその範囲に多くの島嶼を含み、また2つの大きな半島によって地理的に分断されている。そのため鳥類については分布、繁殖、動向に関する資料が少なく不明な点が多い。大隅半島、特に南大隅についてはサシバの渡りで有名な佐多岬での観察記録は比較的多いものの、他の地域では記録そのものが少ないように感じる。

今回の調査で観察記録した鳥類38種のうち留鳥または漂鳥として1年中観察することができると考えられるものはゴイサギ、ツミ、コジュケイ、ヤマドリ、イソシギ、カワセミ、アオゲラ、コゲラ、キセキレイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、ミソサザイ、ウグイス、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシブトガラスなどがあげられる。但し、ツミ、イソシギ、キセキレイ、サンショウクイ、ミソサザイについては繁殖の可能性は否めない。それ故鹿児島県下のほかの地域の状況から考えてみると春季・夏季に観察されたとしても稲尾岳の存在する位置的にも繁殖の確固たる証拠となる巣の発見、あるいは巣立ち直後の雛の確認をしていく必要がある。特にイソシギについては今のところ鹿児島県での繁殖の記録の報告はないようである。ツミについては11月10日に少なくとも3羽を観察した。成鳥の雄、雌と思われる若鳥、幼鳥が観察され、30~40分に1度くらいの割合高い頻度で出現した。その行動は立ち枯れした木の見晴らしのよい高い枝にとまって休み、あるいは上空を旋回し、あるいは小鳥類を追って急降下するなどのものだった。大型ツグミを追って大きな羽音をたてて飛ぶ姿も数回観察した。冬鳥として飛来すると考えられるものはハイタカ、コチドリ、イカルチドリ、ヤマシギ、キセキレイ、セグロセキレイ、ビンズイ、ジョウビタキ、シロハラ、ツ

グミ、ミヤマホオジロ、アオジである。コチドリについては鹿児島市では普通に繁殖しているの
で、大隅半島の砂質の海浜や河口で繁殖している可能性も高く、漂鳥もしくは留鳥に含めるかは
議論の余地がある。旅鳥として通過するものはキアシシギ、アカハラをここではあげておく。キ
アシシギは他のシギ科、チドリ科の鳥やサギ科、セキレイ科の鳥とともに花瀬で観察した。アカ
ハラは少数は越冬しているもののそのほとんどは本来の越冬地である東南アジアへ渡る途中で立
ち寄ったものであろう。

標識調査は11月10日のみ行い、12mの網を使用した。捕獲個体数は2個体と少ない。それぞれの
個体の計測値と特徴は別途、表2とその下の写真を参考にさせていただきたい。アオジは雌の第1
回冬羽と思われる個体を、アカハラは成鳥と思われる個体をそれぞれ捕獲観察した。アオジは尾
羽の最外列の白が大きく付け根のまで入り込んでいないことや下面の黄色みが強いことなどか
ら日本産亜種の *Emberiza spodocephala personata* と考えられる。アカハラは日本で記録され
る可能性を考えると2亜種があげられる。アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus* とオオアカ
ハラ *T.c.orii* であるが計測値で考えると前者♀の可能性が強く、体色などから考えるとアカハラ
T.c.chrysolaus であろうと考えられる。今回、捕獲できた鳥類は、2種2羽と少ないものであ
った。アオジは冬鳥として飛来し春に北帰行を始めるまでは稲尾岳周辺を生活の場とし、アカハラ
はさらに南下していったものと考えられる。

知りうる限り稲尾岳での鳥類調査の報告はされていないようで、今回の調査報告が同地でのもの
としては初めてと考えられる。しかしながら調査の時期、回数は十分とはいえず、よって今回
観察された鳥類が稲尾岳で記録された鳥類のすべてであるが、今後調査を続けていけばもっと多
くの鳥類を観察できるものと思われる。

参考文献

- Clieve Byers, Urban Olsson, Jon Curson. 1995. BUNTINGS AND SPARROWS. Pica press
鹿児島県. 1987. 鹿児島県の野鳥. 竹宝堂印刷. 鹿児島県
川路則友・安部淳一・高良武信・溝口文男. 1987. 鹿児島県鳥類目録. Strix vol.6. 日本野鳥の会
東京
清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑 I. 講談社. 東京
茂田良光. 1994. 形態と識別・30・アオジー青鴉. BIRDER. 1995年6月号. 101:46-52. 文一総合出版.
日本鳥類保護連盟. 1988. 鳥630図鑑. 日新印刷株式会社
高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. 日本野鳥の会. 東京
原田政巳. 1994. 大型ツグミをじっくり見る. BIRDER. 1994年4月号. 87:18-33. 文一総合出版.

(執筆: 所崎 聡)

表1 一稻尾岳の鳥類リスト

-
- コウノトリ目 CICONIFORMES
サギ科 Ardeidae
 ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*
- ワシタカ目 FALCONIFORMES
ワシタカ科 Accipitridae
 ハイタカ *Accipiter nisus*
 ツミ *Accipiter gularis*
- キジ目 CALLIFORMES
キジ科 Phasianidae
 コジュケイ *Bambusicola thoracica*
 ※ヤマドリ *Phasianus soemmerringii*
- チドリ目 CHARADRIIFORMES
チドリ科 Charadriidae
 コチドリ *Charadrius dubius*
 イカルチドリ *Charadrius placidus*
- シギ科 Scolopacidae
 イソシギ *Tringa hypoleucos*
 キアシシギ *Tringa brevipes*
 ※ヤマシギ *Scolopax rusticola*
- ブッポウソウ目 CORACIIFORMES
カワセミ科 Alcedinidae
 カワセミ *Alcedo atthis*
- キツツキ目 PICIFORMES
キツツキ科 Picidae
 アオゲラ *Picus awokera*
 コゲラ *Dendrocopos kizuki*
- スズメ目 PASSERIFORMES
セキレイ科 Motacillidae
 キセキレイ *Motacilla cinerea*
 ハクセキレイ *Motacilla alba*
 セグロセキレイ *Motacilla grandis*
 ビンズイ *Anthus hodgsoni*
- サンショウクイ科 Campephagidae
 サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*
- ヒヨドリ科 Pycnonotidae
 ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*
- モズ科 Laniidae
 モズ *Lanius bucephalus*

- カワガラス科 Cinclidae
 ※カワガラス *Cinclus pallasii*
- ミソサザイ科 Troglodytidae
 ミソサザイ *Troglodytes troglodytes*
- ヒタキ科 Muscicapidae
 ジョウビタキ *Phoenicurus aureus*
 アカハラ *Turdus chrysolaus*
 シロハラ *Turdus pallidus*
 ツグミ *Turdus naumanni*
 ウグイス *Cettia diphone*
- エナガ科 Aegithalidae
 エナガ *Aegithalos caudatus*
- シジュウカラ科 Paridae
 シジュウカラ *Parus major*
 ヤマガラ *Parus varius*
- メジロ科 Zosteropidae
 メジロ *Zosterpos japonica*
- ホオジロ科 Emberizidae
 ホオジロ *Emberiza cioides*
 ミヤマホオジロ *Emberiza elegans*
 アオジ *Emberiza spodpcephala*
- アトリ科 Fringillidae
 カワラヒワ *Carduelis sinica*
- ハタオリドリ科 Ploceidae
 スズメ *Passer montanus*
- カラス科 Corvidae
 カケス *Garrulus glandarius*
 ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos*

表 2 - 捕獲鳥の測定結果 (1996年11月10日)

種名	性別・年齢	露出嘴峰長	ふ蹠長	尾長	自然翼長	備考
アオジ	♀ 1 W	12.8	21.2	換羽中	70.0	尾翼外列の観察
アカハラ	♀ A	19.9	32.9	87.0	122.0	

1 w ; 1st wintew の略。第 1 回冬羽。 A ; adult の略。

表中の数字は単位はすべて (mm)。なお、アオジの尾長は換羽中のため測定不能だった。そのため表中には「換羽中」と記載した。

①



②



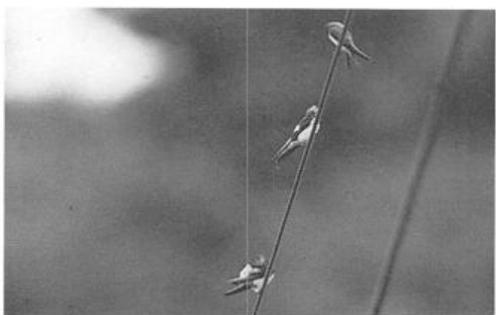
③



④



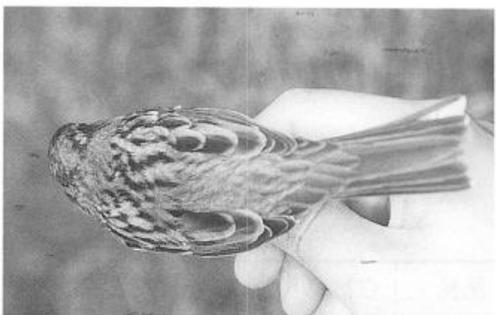
⑤



⑥



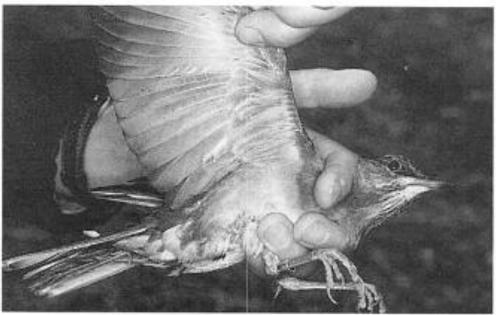
⑦



⑧



⑨



- | | |
|-----------|---------|
| ① スズメ | ② コサギ |
| ③ アオサギ | ④ ヤマセミ |
| ⑤ 3種類のツバメ | ⑥ シロチドリ |
| ⑦ アオジ♀ | ⑧ アオジ♀ |
| ⑨ アカハラ | |

(執筆: 所崎 聡)

10 稲尾岳周辺の哺乳類

(1) はじめに

哺乳類の現地調査は稲尾岳（標高930m）を中心に田代町、佐多町、内之浦町の3町で行った。また、稲尾岳とは少し離れているが、有明町の野井倉開田のトンネルでコウモリを調査した。

(2) 調査期間および調査方法

調査期間は1996年8月～1997年1月の6ヶ月間に実施した。

現地を歩きながら、動物の足跡、食痕、糞、巣穴、モグラトンネル等フィールドサインを探がし記録する踏査法や地元の猟友会の人や動物に詳しい人に話を聞く聞き取り法で行った。

当初、調査地を稲尾岳にしほり、8月8日登山道北口から頂上の稲尾神社まで約2kmの登山コースを中心に調査したがイノシシ、モグラ、テンのわずか3種類しか見つからなかった。そこで、調査範囲を稲尾岳のすそ野まで広げ、特に佐多町を重点的に調査した。また、コウモリが生息する有明町の野井倉開田の用水路トンネルも調査した。

(3) 調査結果

① 食虫目 INSECTIVORA

モグラ科 Talpidae

モグラ *Mogera wogura* (写真-1)

今回調査したほとんどの地区の人家周辺、田畑、牧草地や稲尾岳の山頂付近でもモグラ塚などが見られた。

また、ペットボトルを利用したモグラよけの風車もあちこちで見られ、分布の広さを感じた。



写真-1 土にもぐろうとしているモグラ

② 翼手目 CHIROPTERA

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum*

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

ユビナガコウモリ *Miniopterus schreibersi*

モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus*

有明町野井倉開田牛ヶ迫取入口の用水路トンネル（以下第1トンネルという）でコウモリを調査した。

第1トンネルの高さは220cm、幅は240cm、長さが175m、上流の端は菱田川から取水する取入口になっていた。調査した時期は水は落とされていたのでトンネル内の歩行も容易であった。

1995年10月に調査したとき、キクガシラコウモリ、ユビナガコウモリ、モモジロコウモリの3種



写真-2 飛翔するコウモリの群れ

類のコウモリが大群をなし飛んでいた(写真-2)。

コウモリは岩盤が露出した部分の窪みに種毎に集まる傾向がみられた(写真-3)。

ところが、1996年1月3日に第1トンネルを再調査したところ、大群は見られず10数頭が岩の窪みなどで冬眠しているのみであった(写真-4)。

1997年1月3日、再び調査したところ、前年よりさらに少なく第1トンネルではわずか4頭しか見られなかった。

同じ用水路の下流にあるトンネルも調べたが冬眠中のコウモリがまばらに見られる程度であった。

ただ、コウモリの数は少なかったが第5トンネルのコンクリートの隙間で、右前腕にアルミ製の標識を付けた個体が冬眠しているのが見つかった。

このコウモリはモモジロコウモリの雄で、標識にはC-751と刻印されていた(写真-5)。

鹿児島経済大学の船越公威教授に問い合わせたところ、このC-751は船越教授が1995年7月12日、志布志町の片野洞窟でバンディングされた個体で、当時は幼獣であったことがわかった。

今回の調査で野井倉開田の用水路トンネルは、秋にはコウモリの大群の休息場所(ねぐら)として利用していたが、冬は別の場所(洞窟等)で冬眠するものと思われる。



写真-3 キクガシラコウモリ



写真-4 モモジロコウモリ

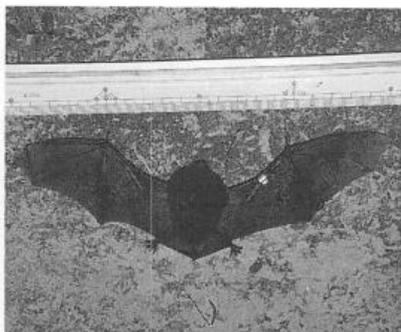


写真-5 標識番号C-751のモモジロコウモリ

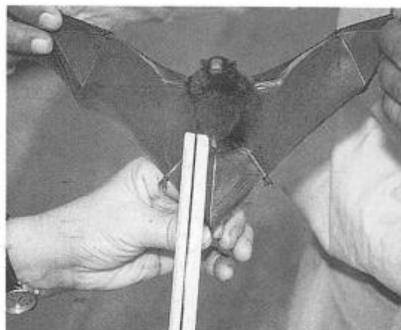


写真-6 ユビナガコウモリ

③ 霊長目 PRIMATES

オナガザル科 Cercopithecidae

ニホンザル *Macaca fuscata*

ニホンザルは稲尾岳の北側にある田代町での生息は確認できなかったが、南側の佐多町では辺塚から打詰、さらに内之浦町にかけての県道74号線沿いに、ニホンザルの糞が多く見られた。8～9月ころはイヌビワの果実を多量に食べていることがわかった(写真-7)。

また、栗の実や、マテバシイの実などの食べかすも見られた(写真-8)。

佐多町役場の話では島泊、大泊、竹之浦、郡、辺塚、打詰といった海岸に近いところに、それぞれ2～3群生息し毎年ポンカンやタンカン、ビワ、サツマイモなど、農作物に大きな被害がでているということであった(写真-9)。

「野猿に注意!」という看板が目を引いた(写真-10)。

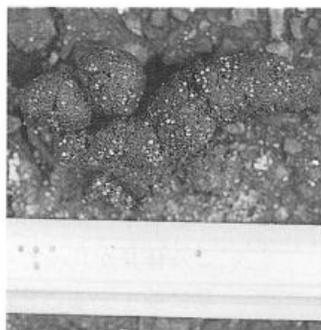


写真-7 ニホンザルの糞



写真-8 ニホンザルの食痕(栗の実)



写真-9 ニホンザルの群れ



写真-10 看板

④ ウサギ目 LAGOMORPHA

ウサギ科 Leporidae

キュウシュウノウサギ *Lepus brachyurus brachyurus*

稲尾岳の北側にある内之牧林道でウサギの糞や食痕が多数見つかった。(写真-11, 12)

9月にはアザミ類を食べ、11月にはセイタカアワダチソウも食べていた。約1mのセイタカアワダチソウの茎が約30cmの長さに食い切れられその葉っぱを食べていた(写真-13)。



写真-11 ノウサギの食痕(アザミ)



写真-12 ノウサギの糞塊



写真-13 ノウサギの食痕(セイタカアワダチソウ)

⑤ げっ歯目 RODENTIA

ヤマネ科 Gliridae

ヤマネ *Glirulus japonicus*

現地調査では確認できなかったが、佐多町大中尾の野嶽澄雄氏からネズミのようなリスに似た動物を見たという情報がよせられた。

およそ10年前の5月、辺塚から田代に抜ける峠付近の国有林で伐採作業をしていたところ体長が10cmぐらい、背中に黒い線があり、尾はふさふさとしていた。動作は鈍く容易に捕まえることができ、放したところ、ゆっくりした動作で樹林に消えたという。

このような状況や動物の特徴から本種はヤマネであったと思われる。

リス科 Sciuridae

ムササビ *Petaurista leucogenys*

夜行性なので姿はなかなか見ることができないが、地元の人話しでは鳴き声は良く聞くという。最近山に樹洞が少なく住宅難のためか、民家の屋根裏で子育てをする例がみられる(写真-14)。

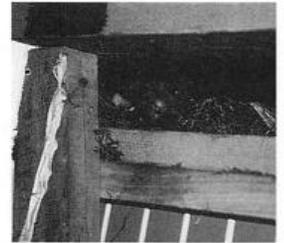


写真-14 屋根裏のムササビ

⑥ 食肉目 CARNIVORA

イヌ科 Canidae

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

内之牧林道で雨上がりの泥の上に足跡があった(写真-15)。

佐多町大中尾の猟師、浜田勇三氏によると、毛皮の需要がなくなり捕獲しなくなったので、最近タヌキが増えているということであった。



写真-15 タヌキの足跡

キツネ *Vulpes vulpes*

佐多町馬籠では1995年の夏から秋にかけ3体の死体が見つかった(写真-17)。この地区では今でも時々キツネの姿を見かけるということであった。

イタチ科 Mustelidae

テン *Martes melampus*

内之牧林道などでテンの糞を観察した。糞は林道のはほぼ中央で多く見られた。

8月の糞は昆虫類が主体であったが、11月の糞には果実も混じていた(写真-16)。

8月30日、佐多町経済課の永吉敏春氏から、同町烏賊浦で見つかった死体を提供いただき計測した(写真-17)。

この個体は雌の成獣で頭胴長45cm、尾長25cm、体重1,300gであった。毛色は黒っぽくすす色をしていた。

元テンの猟をしていた浜田勇三氏によると、この地方には毛色がすす色をしたものと、黄色をしたものの2種類のテンがいるという。



写真-16 テンの糞



写真-17 テンの死体

ニッポンアナグマ *Meles meles anakuma*

今回はフィールドサインを見つけることが出来なかったが、浜田勇三氏によればタスキと同じくらいアナグマも増えているということであった。

⑦ 偶蹄目 ARTIODACTYLA

イノシシ科 Suidae

ニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*

イノシシの足跡やスタ場などフィールドサインは稲尾岳をはじめ多くの場所で見られた。

8月8日朝、稲尾岳登山道北口のある内之牧林道で親子連れの2頭が歩いているのを確認した。イノシシの生息数は比較的多いと思われた。

毎年有害獣として駆除されており、鹿児島県鳥獣統計によると、平成7年度は内之浦、田代、佐多の3町だけで46個体のイノシシが捕獲されている。



写真-18 親子づれのイノシシ

シカ科 Cervidae

キュウシュウジカ *Cervus nippon nippon*

浜田勇三氏によると、シカは佐多町大中尾周辺の川北とか四谷に生息しており、1996年の秋も3頭連れの雌を見ている。また、浜田氏は以前、この地区でシカを数頭捕獲している。数は少ないが佐多町大中尾周辺にシカが生息していることがわかった。なお、稲尾岳周辺の他の地区ではシカの情報はほとんど無かった。

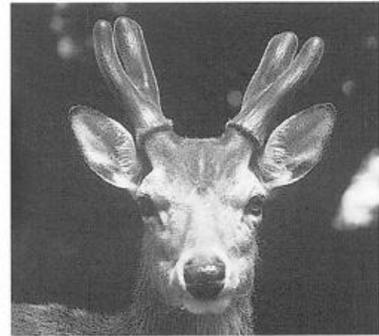


写真-19 袋角の雄ジカ(6月)

(5) まとめ

今回の調査では7目11科14種の哺乳類が確認された。そのうちニホンザル、イノシシ、ノウサギは数が多く、農作物を荒らす害獣とされる傾向にあり、人との共存の難しさを感じた。ただ、地元の人たちもこれらの動物の絶滅は望んでおらず、共存する良い方法はないか模索しておられたことに救いを感じた。

謝辞：今回の調査で、鹿児島経済大学の船越公威教授にはコウモリ類の同定をしていただき大変お世話になった。また、いろいろと貴重な情報をよせて頂いた、佐多町経済課の永吉敏春氏や大中尾の浜田勇三氏、野嶽澄雄氏に感謝するとともに、聞き取り調査に快く応じてくださった地元の人々にも心から感謝申しあげる。

参考文献(資料)

増井光子. 1976.日本の動物,174 pp, 小学館. 東京
安間繁樹.1985.アニマルウォッチング, 271pp, 晶文社. 東京

(執筆: 酒匂 猛)